

中国黒龍江省鶴崗市調査記

佐藤量



中国東北部と鶴崗市
(作成者：大野絢也)

1 炭鉱都市鶴崗と日本人

2015年8月19～21日にかけて、中国黒龍江省鶴崗市でフィールド調査を行った。調査参加者は本研究会メンバーである筆者と菅野智博である。鶴崗市は中国東北地方のなかでも北方に位置しており、ロシア国境にも近い都市である。今回の調査では、長春からジャムスまで寝台列車で11時間、ジャムスからバスで2時間移動して鶴崗市に向かった。炭鉱都市と

して知られている鶴崗は、のどかで落ち着いた都市であった。

鶴崗には、かつて多くの日本人が暮らしていた。「満洲国」(以下「」省略)期には日本による炭鉱開発が進められ、満洲国のなかでも有数の規模を誇っていた。戦後も引き続き鶴崗の石炭は重宝され、中国経済発展の礎となった。もともと昨今は東北経済の落ち込みと石炭需要の減少から、いささか活気が薄らいでいるようであった。中国の街路では、真夏の夕暮れ時に人びとが涼む光景をよく目にするが、鶴崗では人影がまばらだったことが印象的である。鶴崗市内に大学はなく、若者の多くは近隣のジャムスやハルビンに出ていくという。また、市内を歩いていても満洲国時代の痕跡が声高に表象されているわけでもなく、何も知らなければかつて日本人が暮らしていたことは想像できないだろう。

私たちが鶴崗を知ることになったのは、ここで長年暮らした西田瑠美子さんとの出会いがきっかけである。西田さんと本研究会のつながりは2011年に遡る。2011年の年末から2012年にかけて、本研究会のアドバイザーである一橋大学教授佐藤

仁史先生と、そのゼミ生である菅野智博、森巧が計 6 回にわたって西田さんにインタビューを実施した⁽¹⁾。その際の計 12 時間に及ぶインタビュー記録は、今後「西田瑠美子氏口述記録」としてまとめる予定であるが、その経歴は非常に興味深い。西田さんは、戦前に農業移民として渡満し、戦後は紆余曲折を経て中国に残留して中国籍を取得され、家族とともに鶴崗で暮らした。そして 1980 年代以降は拠点を日本に移し、中国帰国者の支援活動に参加されている。今回の鶴崗調査では、西田さんご本人とご家族にも同行いただいて、鶴崗市内を歩きながら西田さんのライフヒストリーをたどった。

2 西田瑠美子さんの経歴

西田瑠美子さんは、1934 年福岡県若松市（現北九州市）に生まれた。敗戦直前の 1945 年 3 月に、先に満洲へ渡っていた姉たちを追って家族で移住した。満洲では黒龍江省通河縣漂河屯に入るが、まもなく終戦を迎えた。その後西田さんはご家族と離れ、保母として中国各地の保育所を移動し、1951 年から鶴崗で暮らすことになる。鶴崗では炭鉱労働者の寮で寮母として働いていたが、翌年には職場の事務職員である中国人男性と 17 歳で結婚した。子どもができたことで鶴崗での定住生活が始まった。それまでにも日本に帰る機会があったが、家族ができたこともあって西田さんは中国に残ることを決断する。自分が日本に帰るためには、中

国人である夫や子どもを置いていかなければならず、家族全員で日本に帰国することができなかったからである。1950 年代に西田さんは「家族みんなで中国で生活するために」中国籍を取得した。

1960 年代から 70 年代にかけての文化大革命の時期にはたいへんな苦労を経験し、その影響は家族にも及んだ。日本人を妻に持つ夫は炭鉱で強制労働を強いられることもあった。苦難の時期を経た 1972 年の日中国交正常化以降、西田さんは日本への帰国を考えはじめるようになる。そして 1988 年に、西田さんは子ども二人とともに 43 年ぶりに日本へ帰国した。帰国を決断した背景には、文化大革命でのつらい体験が大きかったという。

西田さんは帰国後、中国帰国者の生活支援を目的とする「中国帰国者の会」に参加しはじめた。中国帰国者をめぐっては、日本語教育の不備や日本社会への適応など課題が多く、支援が必要な状況であった。多くの中国帰国者は、やっとの思いで帰国したもの、その後の生活は決して楽ではなかった。こうした状況を鑑みて、2001 年に残留婦人 2 人と国家賠償請求訴訟を起こし、中国帰国者の生活補償を訴えた。80 歳を越えた現在でも「中国帰国者の会」の活動に精力的に取り組んでいる。

3 苦労が染み込んだ鶴崗の家

今回の調査で私たちは、西田さん一家が 1950 年代以降長く暮らした鶴崗の家

を訪れた。西田さんは鶴崗に住んでいるときに何度か引っ越しを繰り返しているが、その理由は日本人であるということと近所の人に知られることを恐れたからだそうだ。ときには洗濯物がなくなったり、子どもたちがいじめられたりしたこともあったという。西田さんの家は、炭鉱へと続くゆるやかな登り坂の途中にあった。周囲の家々も古く、もう何年も手入れされていない。「昔はこの辺の建物も新しくて、もっときれいだったんだけどね」と西田さんは言う。途中で道を尋ねた高齢の女性は、偶然にも西田さん家族のことを知っており、久しぶりの再会を喜んでいた。



旧居周辺の家並み

撮影日：2015年8月21日

撮影者：佐藤量

西田さんが暮らした家は、増築され現在でも住居として使用されていた。現在の住人に経緯を話すと、我々も含めて快く家のなかに入れてくれた。家の門に入ると、当時はなかった倉庫が増築されて

おり、中庭ではアヒルや鶏が飼育され、小さな畑や井戸もあった。現在の住人は夫婦2人暮らしのようだ。近所の人びとも何人か集まってきて、西田さんの元気な姿を見て喜んでた。近所の住人が西田さんと語りあい、最後まで私たちを見送ってくれたことが印象的であった。

しかし、彼らと別れてから西田さんに再訪の感想を聞いたところ、意外な答えが返ってきた。

〔再訪してみて〕うれしいというより、悲しいですよ。こんなに変わったんだ、人も家もこんなにぼろぼろになったんだって。家の庭もなんでも。あの家で暮らしている人たちは40代か50代かな、みんな生活が苦しいからね。自給自足に近いかもしれない。病気になったらたくさんお金がかかる。老後のことを考えても貯金をしなければいけない。冬は寒いし生活は楽じゃない。生きていかなければいけないから、貧しいけどみんな必死ですよ。

西田さんの口から出た感想は、昔の思い出や旧知の人びとと再会したうれしさではなく、現在の住人の生活苦についてであった。とくに、貧しさ、必死さという言葉が強調されていた。それは戦後に中国籍を取得されて、中国人としてこの地で生き抜いてきた西田さんであればこそその視点といえるだろう。西田さんにとって、久しぶりに再訪した家は、自分自身

だけでなく現在の住人にとっても苦勞の場所だと感じられたのかもしれない。



旧居前に立つ西田さん

撮影日：2015年8月21日

撮影者：佐藤量

4 調査を終えて

今回の調査でもっとも印象深かった出来事は、旧居を再訪したときの西田さんのまなざしに触れたことである。鶴崗の家を再訪しながら昔のことを語る西田さんのまなざしは、懐かしさやノスタルジアといった過去の出来事に対してではなく、今でもそこに暮らす人びとに向けられていた。

戦前中国で暮らした日本人にとって、かつて自分が暮らした家を再訪することは楽しみのひとつであった⁽²⁾。とりわけ、大連や長春（旧新京）、瀋陽（旧奉天）など、満洲都市部で暮らした日本人に顕著

であり、なかには同窓会などで団体旅行を企画して再訪するケースもある。他方で、もう中国には行かないと心に決めている人も少なくない。変わり果てたという現状を知りたくない、つらく過酷な逃避行の経験を思い出したくないという思いからである。しかし西田さんの視点はそれらとは異なり、現在の鶴崗で暮らす人びとの生活に向けられていた。日本というよりは、中国からのまなざしに近いといえるかもしれない。

今回の調査では、複眼的な視点を意識することの重要性を西田さんから学ぶことができた。「満洲の記憶」を考えていく上で、かつて満洲国であった場所が現在どうなっているのか、そしてそこに暮らす人びとがどのような生活を送っているのかという点もあわせて考えていきたい。

⁽¹⁾ 2013年には、本研究会が主催した講演会「『中国帰国邦人』—私たちは歴史の中に生きている—」に西田さんをお招きしてご講演いただいた。

⁽²⁾ 戦後中国では、「敵性財産」としての日本人住宅を中国人に分配する住宅政策をとってきたこともあり、戦後建物がそのまま住居として使用されていることも多い。